



執筆者

## 爾見 まさ子

しかみ まさこ

東京都港区みなと保健所保健予防課  
新型コロナウイルスワクチン接種担当看護師

1998年看護師免許取得後、地元である愛知県の病院で主に内科病棟に勤務。成田空港検疫所、羽田空港検疫所支所、国立国際医療研究センター国際感染症センターを経て、2021年より現職。国際医療福祉大学大学院医学科公衆衛生学専攻在学中。

# 感染予防、重症化予防のために「少しの後押し」を

## 一人ひとりの不安や訴えを傾聴し 一番安心できる方法を考え、伝えたい

私が感染症に興味を持ち、関わってみたいと思うきっかけになったのは、自身がマラリアに罹ったことでした。2008年2月から6月に西アフリカへ渡航した時のことです。

当時の私は、アフリカの生活環境や現地で流行している疾患等の知識はほとんどありませんでした。さらに予防接種については、黄熱病ワクチンは接種済みであったものの、A型肝炎などほかに推奨されているワクチンやマラリアの予防薬は出発までに間に合わず、言わば「無知」「無防備」な状態でした。そして「自分が罹るわけがない」と思っていたマラリアでしたが、帰国後に重症マラリアと診断され、疾患の知識と予防がいかに重要か痛感したのです。

約4カ月間の渡航中は、首都である比

較的都市部のほか、電気やガスが通っていない集落で1週間程度過ごしました。市場では生魚や生卵が炎天下で売られているような環境で、賞味期限の記載もない調味料、ポンプで汲んだ水で調理や洗いをしていました。

食事で現地の屋台を利用することや、村に住む子どもたちに誘われて近くに泊っていた川に飛び込むこともあり、宿泊していたところには蚊帳もなく、乾季で暑い季節でもあったため夜間も半袖などの薄着で過ごし、防蚊対策をほとんどしていませんでした。滞在中、私は特に体調を崩すことなく過ごしていたためか、感染症に対する意識も薄れていたのかもしれないと感じています。

そんな私でしたが、ふと帰国時にマラリアのことが頭をよぎり、到着した空港検疫所に立ち寄って発熱した際の対応について相談しました。マラリアは早期に適切な治療を行わないと重症化し、死に至ることもある疾患です。数日後、発熱した時にすぐに受診できたこと、渡航先を医師に告げたことでスムーズに診断がついたことなどは、その検疫所でのアドバイスが生きたのだと実感しています。

無事にマラリアから生還した私は、輸入感染症に関心を持ち、水際で輸入感染症の侵入を防ぐ空港検疫所、そして渡航前のワクチン接種や健康相談、海外から帰国した体調不良者を診療する病院での勤務を経験してきました。

現在は、新型コロナウイルス感染症の影響で海外渡航が制限されているため、

そういった病院での受診者は限られていると思われ。私がコロナ禍前に勤務していたトラベルクリニックでは、自身が西アフリカでマラリア感染した経験や、受診した患者さんの経験などを踏まえ、新たに海外渡航する方々に感染症予防について情報提供を行っていくことが私の役割ではないかと考えて業務に当たっていました。

医師の診察後にワクチン接種等の予防対策は本当に必要なかと悩まれる方も少なくありません。実際に私自身もそう考えていました。しかし、「病気に罹ったら楽しい旅行どころじゃないですもんね」と感染症予防について理解される方や、真剣に話を聞いてくださる方もいました。そんな方々の少しの後押しをすることに、やりがいを感じていました。

私は現在、保健所で新型コロナウイルスワクチンの接種業務に携わっています。

ここでもやはりワクチン接種後の副反応や有効性等に対する不安や悩みを持つ人が少なくありません。3回目は副反応が強く出るのか、どのワクチンを接種すれば一番効果があるのかなどといった電話が住民から寄せられています。

コロナワクチンに関する研究結果や公的機関より示された情報など常に新たな情報を取得しながら、一人ひとりの不安や訴えを傾聴し、ワクチンによる感染予防および重症化予防のため、その人にとって安心できる方法を一緒に考え、伝えていきたいと思っています。